

---

# タンゴを君と共に

西崎想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タンゴを君と共に

### 【Nコード】

N3902Z

### 【作者名】

西崎想

### 【あらすじ】

夢見病の謎に迫ろうと、さいか雑賀 ゆづり夕理は病気を患っている、少年翔真を見舞う。

## 夢見病（前書き）

こんにちは。西崎想と言います。

いろいろな人から、読んでほしいので、ジャンルに関係なく見ていってください。面白いものを書きたいです。  
よろしく願います。

## 夢見病

なんか、暇だなあ。

私はそう思っていた。

そして、この、（ボランティア）に身を投じようとしている。

私の選んだのは、医療。

前に、新聞で、「夢見病」というものが、流行っているというのを、読んだことがある。

夢見病を引き起こしている、原因はまだよくは解っていない。

「まあ、今の世は、何でもあるだからなあ」

そういう風に思っていた。

堺女子医大。

そこに、まさに、夢見病を患っている患者を訪ねた。

コンコン。

「どうぞ」

そう言われて、私は病室の扉を開けた。

「失礼します」

「貴方は？」

「私は、ボランティアで来た者です。名前は、さいか雑賀 ゆづり夕理です」  
私はそう言って、頭を下げた。

「私は、橘 翔真の母です」

「その……翔真君の病状は？」

ベットに横たわっている、少年。まだ、幼さの残る、甘い、顔。結構綺麗な寝顔をしているな。

「翔真は……一年前から……眠っています」

「そうですか……私に出来ることなら何でもします。おっしゃってください」

「ありがとうございます、雑賀さん」

そう言われて、私は部屋を出た。

外の喫茶店。

そこで、私はコーヒーを飲みながら、夢見病を調べた。

なになに、

夢に堕ちたまま目覚めないところから、こう名付けられた。

……か、

そうか、この病気は、ずうっと目覚めない。のか。

私は、名前の由来に、なんとなく納得していた。

それを治す方法は……、

突然、目覚めたり、一生、覚めなかったり……

治療法は、今のところ、わからない？

「えー？」

私は、思わず、喫茶店のテラスで声を出した。

あつと、……まずいますい。

これは、意外に難病かも。  
そうだな……、

図書館へ行こう。

そして、（図書館）に着いた。

光

いっぱい、とまではいかないものの、そこそこの量の文献が見当たった。

調べていると……、

「かかっている人たちは、決まって、”良い笑顔”をしている」とか、

「病後の回復力は、想像以上に良い」

「そつかあ……別にいやな夢を見ていない……のかなあ」

しかし、それだけの知識では、

翔真君の

「眠り」から、どうすれば、

「目覚めさせる」事が出来るのか。

それが解らない。

「困ったなあ……」

しかし、ここで諦めるのは私らしくない。

そう、思い、もうひと踏ん張り、をしようと、図書館めぐりをした。

そうして、一週間あたり経った頃だ。

私の家の、壁に……、

「なに？……こんなドア。あつたかしら……」

私の目の前に、光った扉が見えている。  
家族に聞いた。

「なにいつてんの？」

「ドア？」

「夕理、大丈夫？今日は、早くお休み」

だと言う。

じゃあ、私の見えている、この、

光るドアは、一体なんなのだ。

「ようし……」

私は、意を決して……

扉を……

開けた。



扉の向こう

ギイイイ……

扉を開ける私。

中は、霧の立ち込める、白銀の世界。

ここ……どこ？

私は辺りを歩いた。  
でも、誰もいない。

誰かいないのかな……。

木が生い茂っている。

あれ？

あれは……建物だ。

人……住んでるのかな？

そのうち、

目の前が明るくなって……。

「姉ちゃん！」

弟の、たくの声だ。

瞳を開けると……。

たくの顔の、ドアップだ。

「……たく？」

あれ？私はどうしたのかな……

「姉ちゃん！どうした」

「え……？」

「急に倒れたから……大丈夫か？」

「う、うん……」

あの扉は……？

……。

ある。

さっきのままだ。

金に輝く扉。

しかし、これは誰にも見えないのね。

「異次元体験だわ……」

私は、今の出来事は、誰にも理解されない。と、思ったので、誰にも喋らなかつた。

## うさぎ帽子の少年

私は、唾をのみこんだ。

「さあ、行くぞ」

そして、

金色の扉を開けた。

ギイイ……

中は、静かだ。

そして、白い。

誰か……いないかなあ……。

おそろおそろ……と、言うよりは、わくわく感の方が強い。

歩いていくと……、

しゅっ……、

「え？」

何かが、私の前を横切った。

しゅ、しゅっ……

まただ、

今度は二度。

私は、その者達に、声をかけた。

「私は、怪しい者ではないわ。こっちへ、姿を見せて」  
そう言つと、

「……ほんと？」  
と言う声が聞こえた。

「ええ、ほんと」  
「……ふうん……」

警戒心の強い者でもなさそうだ。

そして、

その者は現れた。

小さい人間。

かわいい、ウサギの帽子をかぶっている。  
……ウサギ……じゃないよね。

小さい、と言つたが、その者は、幼い、子供なのだろう。  
ほつぺたが、丸く、光っている。

「お姉ちゃん、どうやってここに来たの？」  
「本を、読んでね。この世界の扉を見つけたの」  
「扉、ほかの人は分かんないんでしょ？」

「……そうよ。……よく、知っているわね」

「僕、ここにずっと、住んでるの」  
「ずっと?」

子供は、その言葉にうなずいた。

「うん、他の人らは、途中で入ってきたりするんだけどね」

「そっか。その人たちは?」

そう私がしゃべると、子供は、指を指して、

「向こう」

「そっか、連れて行ってくれない?」

「うん」

子供はそう言うと、

「僕、ゆうた。って言うの」

「ゆうた君ね。ほかの人の所に行こっか」

そう言うと、ゆうた君は、私の手を引いた。

歩いていく、私とゆうた。

すると、

なんか、色が……

出てきた。

## ありがとう、光の扉

「ゆうた君、貴方はどういったひとなの？」

私は、ウサギ頭の少年に訪ねた。

「僕？僕はここの住民。ドリームワールドの」

「ドリームワールド？」

「そう、ここは夢に逃げなくなった人が見える世界」

「私も？」

私は、この場所にどうしてこれたのか、疑問を投げかけた。

「貴方は、本を読んだんでしょ？そういう人もいるよ」

「あの……」

私は、話したくなってきた。

「翔真君って知ってる？」

「翔真君？うーん」

「知らない？」

「うん、名前では、覚えてない」

「私、その子を探して来たの」

翔真君の写真を見せて言った。

「ああ、この子ね、知ってるよ」

「知ってるの！？」

「うん、おいで」

そうして、建物の中に入った。

ゆった君は、そこにいる少女に言った。

「おい、クマの少年は？」

「あ、翔真君ね」

翔真君―

翔真君の名前を呼んだ。

「なあに？」

写真の子だ。

「翔真君！私貴方を夢見病から目覚めさせに来たの」

「あ……僕……いい」

翔真君は逃げ出した。

「翔真君！」

なんで、逃げるの！？

「翔真君、貴方、お母さんが、いつもそばにいるのよ？」

「いや、僕、お母さん、嫌い！」

そう言って、クマ帽子をかぶった翔真君は、また逃げ出した。

「翔真君！逃げないで、お願い、翔真君……」

私がそう言つと、翔真君は私の様子をうかがった。

「お姉さん……泣いてるの？」

「翔真君、何があつたかは知らないけど、お姉さんと……帰ろ？」  
「でも……」

「翔真君、なんか、したい事。なかったの？」

「うん……」

そう言うつと、翔真君は、考えているみたいだった。

「僕……」

ダンスを……、

「ダンス？」

うん、タンゴを……。

「お姉さん、タンゴ、踊れないわ」

「僕、踊りたいんだ！」

「習いにいこ？帰ったら」

「……お母さん、許してくれないかも……」

「何で？」



「お金がかかる”っていったもん」  
「大丈夫、お姉さんも頼んであげる」

「ほんと!？」

私は、大きくうなずいた。

光の扉……ありがとう、

私……翔真君を帰らしてあげたわ……。

タンゴを、……踊るんだって、

私も……習いにいって……

一緒に……行くわ。

翔真君と、タンゴを……踊れるように……。

ありがとう、光の……夢たち……



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3902z/>

---

タンゴを君と共に

2011年12月16日20時55分発行